



2003年

**SORA** 4号

晴夜 (4) | 2

柴田 佐知子

戻ると丈の詰まりし曼珠沙華  
母の掌に葡萄の房のどれも余る  
髪結うて帰る故郷や盧の花

一房の葡萄にしづむ夜の家  
無防備な左や低く秋の蝶  
月を待つ梁や柱をほめながら  
月光や息なきやうに赤子眠り  
川を見るひと入れ替はる草雲雀  
名月や塀を出てゐる墓の数  
どの家も月光の道ありて閉ざす

# 天領

十河波津

大河ごと秋の街道湾曲す

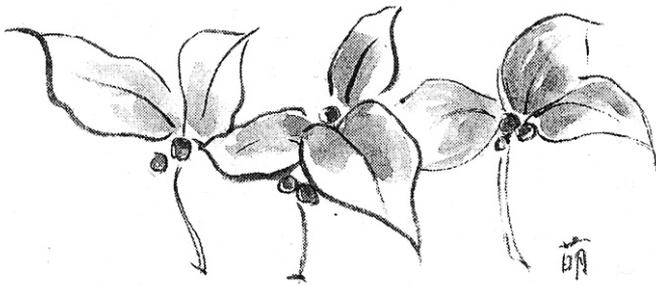
黄落のはじめや風の山より来

小鳥来る館の大甕伏せしまま

雁渡し天領つなぐ恵蘇の宿

朱の柵の低き宮居や夕あかね

曼珠沙華女帝におはす藁葬墓



忌み殿の蹟は木がくれ秋深し

花葛や悲恋はいつもはげしかり

彼岸花赤しどこへも踏み込めず

秋の蝶出あひがしらの大男

櫛もみぢ心音疾く疾く鳴り出せり

竜淵に潜み赤光の星わたる

目の粗きたつぺや漁夫の一夜鮫

極月や一步一步の果ての鐘

河口に近い芦原の中に小さな鴨の飛来池があり、鴨番屋には蒲団などが置いてあった。昨夜の修羅のあとであろうか、池の縁に羽根が散らばっていることもあった。

いつしか芦原そのものが消えていったが、大河は変わらず蕩々と流れている。麦秋の頃、上潮に乗ってエツが上るさまは雄大である。

枯盧原青年の来るところならず 誓子  
青年も逝き赤い橋だけが残っている。

# 月祀る

苑 実 耶

鴟の贅刺さりたる木を避けて過ぐ

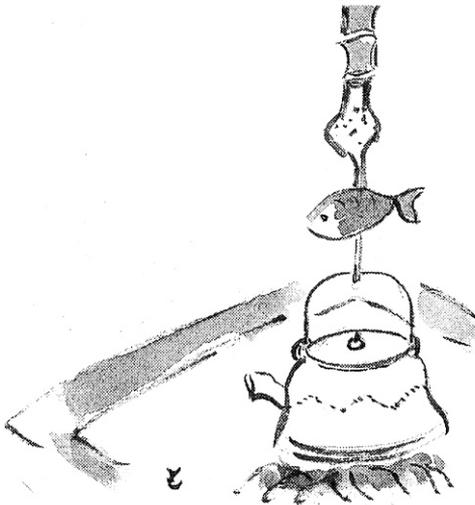
スカートは引摺るほどや牛膝

菊の鉢乗せてゆるりと菊電車

前うしろ鹿九頭に固めらる

首根つこ押さへて蟋蟀捕りにけり

遠ざかる電車芒に吞まれたる



猪歳の女に与ふ猪肉

菊の香や寝そびれし夜を語らひて

本積みしままの机も秋の色

いい人になれさうな月祀りけり

甘納豆笑ふほかなき炬燵かな

雪雲の迫りてきたる屏風巖

貧乏の話きりなし葛湯吹く

塩鮭の切身の重さみな同じ

口論ののちの静けさ寒の雨

結婚以来専業主婦を貫いている。子育てを終え、夫と二人の生活になった今、実に変化に乏しい毎日を送っている。おのずと俳句の題材に夫が登場し、その中で私は当然優しい妻になる。句会で披露すれば絶対異論が出る。

単調な生活の中での、ひと月に一回の句会は、楽しみと緊張感をもたらしてくれる。親しい友人たちとの真摯な時間が心地いい。俳句の中では優しい妻を演じつつ、日常の些細なことも易しい言葉で詠みたいと思う。

# 草の花

高倉恵美子

衰へぬ口が頼りや灸花

形代に離れ住む娘の名も書きし

竹伐りの人が来てゐる日和かな

カンナ咲く農学校の卵市

正座せぬ女ばかりや敬老日

秋草や複式学校ありし村



坑道を出て一本の初紅葉

濡れ縁に生き残りたる青螭螂

満月を猫と見てゐる留守届かな

秋彼岸喜寿になりても本家の嫁

初栗の光放ちて落ちにけり

名月や農婦の集ふ読書会

後ろ手に歩く身ほとり草の花

冬菜種分け合ふ路地の端なりし

間引き菜を漬けて家人を喜ばす

今は全国区で有名になっているサッカーの中津江村に行つて来ました。抜けるような青空で、最高の秋の日でした。広い芝生には遠足の中学生がサッカーを楽しんでいました。

私は早速、生徒さんや引率の若い女の先生に鯛生小学校を尋ねましたが、「知りません。そんな学校ありません。」と言われてしまいました。無理もありません。ここに金山があつた頃のことですから。その鯛生小学校に勤めていた友人は、日田市に講習会などがあると、提灯持参でやって来たものです。ここだけでなく上津江、前津江、赤石など山深い村から来る人たちは、暗い内に家を出るので、皆提灯を持ってきていました。今の人達には想像もつかない話でしょう。遠い記憶がよみがえり懐かしくも楽しい一日でした。

# 棉の花

遠野 萌

父いつも行く先告げず棉の花

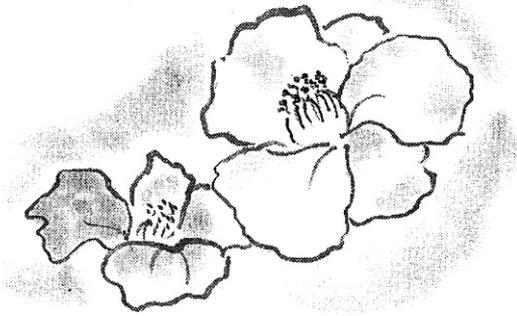
庭石をひとつ跳んでは石路の花

めまとひや日暮にくぐる高台寺

前頭葉右脳左脳や秋の風

縁側にひらく家系図小鳥来る

秋耕の影まだ動く夕間暮



堰越ゆる水はあたらし赤とんぼ

正面に五岳を据ゑし稲架襖

炙られて岩魚は波の形かな

降るがまま暮るるがままや鴟の贅

秋空や湯町に吊るすゆで卵

軒端まで月のかたむく漁師町

旅立ちの航跡を背にコート着る

畝立てし畑の黒ずむ十二月

血脈は同じ町なり除夜の鐘

盲導犬のテレビ放映を見た。生後二ヶ月から一才になるまで、パピーウオーカーに一生を凝縮するべく愛情を注がれて過ごす。訓練施設に戻る日、束の間の自由は終わる。飼主との記念撮影を終え、愛惜の眼差しを背に受けながら振り向きもせずに建物内に消えた。盲導犬の使命を察知しているかのように。この犬達が盲導犬として大成出来るのは「年間に二割程度という。

盲導犬と暮らしている人は「もしも見えたなら何を一番に？」との問いに「この子の顔が見たい。」と言う。どこでも気軽に利用出来る設備と人々の寛容な心を切望してやまない。  
フレーフレー盲導犬！この番組は涙なしでは見られなかった。



空作品Ⅱ 柴田佐知子選

薇に雨壁にピカソの「泣く女」  
橋本五月  
でで虫やそんなに思案しなくても  
落し文すぐに掃かれてしまひけり  
聖女とも魔女ともなれぬ髪洗ふ  
鳳仙花鶏飛んでみせにけり  
潜るたび浮くたび鳩の遠くなる  
潜りても浮きても鳩の一羽きり